

日本における自分史の特色

山下洋輔

はじめに

自分史は定年退職を迎えた「団塊の世代」の経験・技術の伝達手段として、注目を集めている。また、自分の経験を整理し、他者と共有したいという思いを持つ若い世代の書き手も増えている。日々、新たな自分史が書かれ、それらを蓄積していく仕組みも整ってきている。自分史という形式で、膨大な資料が存在している⁽¹⁾。

ライフヒストリー研究における用語は、研究者によって捉えられ方が異なっていることが多い。社会学、人類学、歴史学、地理学、民俗学、心理学などその領域が多岐にわたっており、海外と日本との背景の違いなども、大きな理由であろう。

とくに、自分史は、そのような違いが顕著な研究対象であるといえる。本稿では、自分史研究を行う準備として、対象となる日本における自分史の特色を示したい。

まずは、自分史という用語の起源を探り、そこで提唱された理念について触れる。そして、その自分史がどのように展開していったのかを追い、日本における自分史の特色を提唱者である色川大吉の立ち位置から考察したい。

1. ライフヒストリー研究における自分史

1.1 ライフヒストリー研究における用語の整理

まず、ライフヒストリーについて整理する。ライフヒストリーを邦訳すると、生活史となり、同じ意味と考えることも可能である。しかし、この二つの用語は、調査者・研究者によって捉えられ方に差異があり、多義的に用いられている。

大まかに分類を試みるならば、生活史は民俗学で用いられる傾向があり、ライフヒストリーは社会学で用いられる傾向がある。

有末賢は、「生活史という概念は、ライフヒストリー、個人史・事例史、個人的ドキュメント、ライフ・ストーリーなどの関連概念や派生概念を含む包括的な概念である」と述べている⁽²⁾。生活史をライフヒストリーの上位概念として捉えている。

川又俊則は、対象者本人に重心を置いた「個人生活史」と、対象者の含まれる社会の生活に重心を置いた「社会生活史」の大きく二つに「生活史」を分ける。前者を（パーソナル）ライフヒストリー

と捉えている⁽³⁾。

中野卓は、「個人」の歴史を「生活史」＝「ライフヒストリー」と捉えている。ある社会の消費生活面の一般的な生活の歴史と誤解されるのを恐れて、あえてカタカナ表記にしていると中野自身は述べている。また、個人生活史といたり、ときおり「パーソナル・ヒストリー」と言いかえたり、「パーソナル・ライフヒストリー」と合成語で表現したりしている⁽⁴⁾。

中野邦は、生活史を「歴史的展望の中での生活変遷史」と、「ミクロ的な、固有名詞による」研究とに二分して捉えている⁽⁵⁾。大久保孝治は「生活史」を本人自身が記述した自伝と、口述された内容を聞き手が編集し記述する口述生活史に区分しつつ、広義にとらえている⁽⁶⁾。

本稿では、川又に従い、個人の生活に重点をおいた個人生活史をライフヒストリーと捉え、集団の生活や社会、文化に重きを置いた概念を社会生活史として用いる。

次に、口述史と個人的記録についての整理を示したい。ライフヒストリーは、執筆主体による区分から、二つに分けて論じられている。執筆者が、研究者や調査者といった本人ではない口述史と本人である個人的記録とに分類される。

口述史とは、調査者がインタビューなどの共同作業を通して、語り手やその取り巻く社会現象を解釈し、叙述したものである。一方、個人的記録とは、手紙、日記、自分史、自伝、年賀状、バースデー・カード、履歴書、写真、贈答品、プレゼント、電話、電子メール、インターネット上のホームページやブログなどをあげることができる。これらの他にも、家計簿やメモ、絵画などが個人的記録であると考えられる。そして、技術や生活の変化によって、今後新たな個人的記録が登場するであろう⁽⁷⁾。

1.2 個人的記録と自分史

ここで、個人的記録における自分史について整理を試みる。そのために、自分史と手紙や日記などその他の個人的記録との関係について考えていきたい。

その手がかりとして、かすがい財団法人の活動をみてみたい⁽⁸⁾。同財団は、自分史に関する講座やシンポジウム、ワークショップや講座の企画と実施、日本自分史センターの運営しており、8,017冊の自分史を所蔵する（2008年4月30日現在）。そして、自分史に特化した公募を行っている。今までの公募テーマは、以下の通りである。「漫画イラストで綴る自分史」、「わたしが輝いた日」、「その一言」、「そのとき、わたしは…」、「手帳は語る。」「年表の忘れ物－自分史でつなぐ私たちの時代」。たとえば、「手帳は語る。」の募集内容は、「手帳と文章を合作した作品を募集します。スタイル・構成は自由。手帳のコピーやイラスト、写真など、手帳と文章を使って、自由な発想で自分史を表現してください。」となっている⁽⁹⁾。「手帳は語る。」では、自由な形式で、手帳という資料をもとに編集、再構成しているものが自分史とみなされていることがわかる。

一方、ノーマン・デンジンは、すべては執筆者によって解釈された記録であるという立場から、個人的記録をすべて自分史とみなしている⁽¹⁰⁾。日記、手帳、メモ、家計簿などは、自分の記憶や資料をもとに世界を再構成しているという点で、ライフヒストリーといえる。同様に、写真や絵画も自分

の感性や考えによって切り取ったものを表現しており、ライフヒストリーとして捉えられる。

このデンジンの解釈に重きを置く考えに対して、中野は自分史を歴史的現実としての信憑性をそなえた歴史として再構成されたものと捉え、歴史的現実を記述した作品としての相対的に信頼できる確かさを強調している。回想のなかで思い違いが起り得るため、手帳、日記、写真などの個人的記録⁽¹¹⁾や当時のことを記した資料で確かめる必要性を述べている。そのうえで、歴史的現実とは、幻覚、幻聴や超自然的現実といった人々の多元的現実からも成り立っていると考えており、執筆者の解釈にもとづくという考えを示している⁽¹²⁾。

2 日本における自分史の特色

2.1 日本における自分史の起源

自分史という用語は、1975年に色川大吉の『ある昭和史—自分史の試み』によって提唱された。色川は、「客観的歴史観察と称して、自分を神にもひとしい超越的立場に置こうとすることは、また置けると考えるのは幻想」とし、「この戦争時代に眠っていた個人史を掘り起こし、その主体と状況の内的結節点にメスを入れつつ積極的に『私』を押し出した自分史を記述したい」と述べている⁽¹³⁾。また、同時代の出来事に対する偏見を自己点検し、修正し、歴史の全体像へと接近するために自分史を書くとも述べている⁽¹⁴⁾。そして、自分史を「当人にとってはかけがえのない“生きた証”であり」⁽¹⁵⁾、「一人々々の庶民の切実な認識の記録」⁽¹⁶⁾と定義している。

橋本義夫のふだん記運動が自分史の原型であると、色川は紹介している。橋本は、1960年に『平凡人の文章』という小冊子を出し、19668年の「ふだん記」第1号から本格的な運動が始まった⁽¹⁷⁾。「万人、みんなそれぞれ生活という、自分たちの労働をもっている。またその下には、だれでもほとんど同じ人間性がある。この労働着と人間性を、自分で書き、それを文章にするのが『ふだん記』である」と橋本は説明している⁽¹⁸⁾。橋本は、新人優先、競争しない、ヘタに書こう、序列なし、愛情のない批判はしないとといった原則のもと、ふだん記の運動を続けた。「一介の庶民として、これだけはどうしても書き残しておきたいという痛切な経験を、形式はどのようなものであれ（詩でも画文でもエッセイでもよい）記録したものを橋本は『ふだん記』として包括していた」と色川は振り返っている⁽¹⁹⁾。

色川は、「自分史の核は歴史と切りむすぶその主体にある（中略）自分と歴史との接点を書くことにある」⁽²⁰⁾とし、自分の体験と時代状況との結びつきについて書かれている点に、文学やその他の文章運動との違いを見出している。

以上、自分史における自分史の起源は、橋本の「ふだん記運動」を原型とし、歴史に生きる庶民の主体的な叙述であり、自分の体験と歴史との関連を認識する記録である、と捉えることができる。

2.2 自分史の提唱者・色川大吉について⁽²¹⁾

ここでは、自分史という用語を造った色川大吉の思想をみることによって、日本における自分史の特徴について考えたい。

色川は、日本歴史学において民衆思想史研究の第一人者とされている。まず、注目したいのは色川が歴史研究者であるという点である。彼の民衆思想史研究は、戦後歴史学に位置付けられ、ランケ以来の実証主義に基づいた資料から歴史的事実を描くスタイルをとる。戦後、歴史学は皇国史観への反省から、二度と戦争の過ちを犯さぬよう科学的な態度によって事実を追及することを目的としてきた。色川自身、「私はその庶民の人生記録を貴重な歴史の資料として受けとめた歴史家、研究者」と称している⁽²²⁾。この研究手法の基本は、ポストモダンの潮流や社会史の流れを汲む研究とは一線を画すものである。

ここで、歴史叙述、戦争体験、近代主義という三つのテーマを色川の文章から抽出し、彼の思想をたどりたい。この三つのテーマを取り上げるのは、書き方、内容、思想の点において、自分史を考える際に重要であるとの見立てからである。

2.2.1 歴史叙述

色川は、高校時代にブルクハルト、ホインジガ、ランケの歴史叙述の名作に引き込まれた経験を語っている⁽²³⁾。戦後になって読んだ、クロボトキンの『フランス革命』、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』、エンゲルスの『ドイツ農民戦争』では、革命における歴史叙述の面白さを堪能したと語っている。日本史の領域では、石母田正の『中世的世界の形成』が最も肌合いの合う模範となったという。

その中で、ひととき大きな影響を与えたのが、ハーバート・ノーマンの『クリオの顔』である。この書物から色川は、一つの啓示を得たという。優れた歴史叙述は、大いなる芸術である、と。また、「私のたった一人の先生となり得べき人」として服部之総をあげている⁽²⁴⁾。服部は、厳正な理論家であるだけでなく、ノーマンと共通して叙述の芸術性を理解している人物として捉えられている。色川に影響を与えたこの二人は、1956年、1957年にあいついで自殺している。

次に、歴史叙述に関わる色川の背景として、新協劇団の演劇研究所に入った経験に注目したい。ここで色川は、言語ではなく肉体による表現世界を知ることになる。今に生きる俳優の身体を通して、たとえばシェークスピアの中世イギリスのマクベスならマクベスの世界の苦しみを表現する。模倣ではなく、俳優の実感として再生するというその信念に直面し、色川の研究を方向付けることとなった。

三つ目は、民俗学への接近である。色川は、柳田国男の民俗学を歴史学に取り入れようと試みている⁽²⁵⁾。その一例として、色川が調査した秩父事件における民話を紹介する⁽²⁶⁾。秩父事件にて、困民党の総理・田代栄助が500円を持って逃げてしまったことに対し、全員参加で最後まで戦った風布村の人々は田代らを裏切り者として殺してやると探したが、のちに田代が絞首刑となり、その亡骸が風布村の峠を越える時、村人全員が泣きながら亡骸を手から手へ渡して峠を越えさせたという。しかし、この話に感動した色川が調べてみると、そのような証拠はなかったのだ。ここから色川は、民話の創出・形成過程と民衆の意識変革の過程と重なり合うことに注目する。歴史的事実を復元することよりも、集団的想像力である民話から歴史の意味を見出す可能性を示している。

2.2.2 戦争体験

色川に限ったことではないが、彼にとって戦争は大きな意味を持つ。ここでは、天皇制研究とエリートの否定につながる経験についてみていきたい。

色川は、1925年に生まれた。日本とアメリカ、イギリスなどとの全面戦争が始まる半年ほど前にあたる1941年に高校入学。高校の修了年限を半年短縮され1943年10月に大学に入学するが、すぐさま「学徒出陣」の待機命令を受け、1944年入隊する。

「天皇陛下万歳」という時代に育ち、そういった時代にとらえられていた、と色川は振り返る。この時代に、日本に生まれた宿命を恨みながらも、自分自身の内面までをも規律してきた天皇制との格闘が、近代日本における精神史の研究へとつながることになる。

色川は、高校に入学し、インテリやエリートとして生きる道が開かれていた。しかし、東京帝国大学にて皇国史観の代表者というべき平泉澄の教えを受け入れることができず、さらに出身階級を認めない軍隊生活や生死の苦難から、時代を作っている民衆の重要性を改めて認識するのである。義理人情、知恵、生活力、耐久力、その一方で、弱さ、無知、差別・偏見、エゴイズム、したたかさなどを民衆は持ち合わせ、それらが社会を動かすという直感を戦争によって得たと述べている。

2.2.3 近代主義

最後に、近代主義について述べたい。色川の指す近代主義とは、欧米近代市民社会を近代化、民主化、自由社会の理想とする考え方である。

色川の研究を方向付けた大きな要因として、北村透谷との出会いをあげることができる。北村透谷は、近代的自我と葛藤した知識人として取り上げられることの多い人物である。歴史に生きる自分の主体性を模索した透谷の思想形成を探るため、色川は三多摩地域における自由民権運動の資料を求め歩くのである。

その成果が、「困民党と自由党」である。反体制内にも貫かれている近代主義を指摘し、士族知識人や豪農民権家たち指導層と民衆との乖離が描かれた。この視座を色川が獲得していく背景として、栃木県の粕尾村での教員経験と60年安保闘争について注目したい。

1948年、色川は大学を卒業後、足尾銅山近隣の粕尾という山村にて新制中学の教員となる。第二次農地改革の真只中にあり、色川は山林労働者、貧農小作層、青年団員らと学習会や演芸会を開きながら、村に入っていった。その中で、古老から村の歴史を聞き、前述した民話への興味のほか、近代主義とは対立する歴史の存在に目を開かされていった。

しかし、60年安保闘争では、国家権力に対抗する民主か独裁かといった単純な構造ではないことを目の当たりにする。より複雑な体制としての近代主義を問い直す民衆内部での思想の戦いであったと、色川は回想している。

近代主義の弊害として、色川は環境破壊と人間関係の荒廃を指摘する。これらの問題に対して、色川は現場からの究明を試みる。水俣での不知火海総合学術調査団の団長としての取組みや自分史運動

への関わりは、色川の近代主義との格闘といえる。

以上、自分史を提唱した色川が歴史学研究者である点を押さえ、三つのテーマから彼の思想をたどった。歴史叙述をめぐる色川の経験は、自分史研究で問題とされるフィクションに対する特徴を示す。そして、戦争体験を通して得た直感は、民衆を主体とした歴史を提唱するための支えとなる。さらに、近代主義との格闘は、歴史に生きる自分の主体性の模索へとつながる。これらは、日本の自分史の特徴を示す要素といえる。

2.3 日本における自分史の背景

自分史の運動は、橋本義夫のふだん記運動からはじまったと色川は述べている⁽²⁷⁾。しかし、自分の経験を文章で綴る運動という視点でみるなら、大正時代の生活綴り方運動にまでさかのぼる「綴る文化史」の流れに位置づけられるだろう⁽²⁸⁾。もう一つは、歴史家の主体性を扱ったある試みであり、戦後歴史学の流れに位置づけることができる。

本節では、日本の自分史の背景となる叙述をめぐる動向について整理したい。

2.3.1 文章運動としての背景

まず、自分史の文章運動としての背景をたどりたい。1872年の学制により、作文が小学校に取り入れられた。当時は、手紙や書類の作成のための実用を重視したものだった。1900年の小学校令により、作文が綴り方に改められ、実用中心から題材が広がった。鈴木三重吉は、綴り方を「人間教育」の一つとして取り扱った⁽²⁹⁾。『赤い鳥』の影響もあり、学校教育の現場で生活の現実を綴る生活綴り方運動が広がった。

戦後、生活記録運動が展開された。1951年に出版された無着恭成編『やまびこ学校』（百合出版）は大きな反響を呼び、子どものみならず、労働者や主婦など大人への綴り方運動へと広がった。サークルやグループの中で書かれ、個人の体験の社会的意味を認識し、ありのままに書くことが目指されていた⁽³⁰⁾。この生活記録運動の退潮後、1960年代に八王子で生まれた「庶民の文章運動」が、ふだん記運動である。

2.3.2 歴史学への問題提起としての背景

次に、歴史学への問題提起である自分史の背景について考察したい。とくに、歴史叙述への問題提起となった国民的歴史学運動、昭和史論争、民衆思想史の潮流に注目する。

1950年代前半、生活記録、生活綴り方、あるいは、ルポタージュ、記録文学において、普遍性と個別性、作為性と自然性、客観主義と当事者主義といった差異が議論されている。同じ時期に、歴史学においては、国民歴史学運動として歴史叙述をめぐる議論が行われた。

国民的歴史学運動は、石母田正によって提唱された。「歴史を与えられるのではなくみずから書く」

ことを推奨し、歴史の当事者である民衆自身が「みずからの歴史について考え、かつ書くこと」を主張した⁽³¹⁾。

この国民的歴史学運動の代表的叙述として「石間をわるしぶき」⁽³²⁾が取り上げられる。この作品の特徴は、生活者の代理人としての「私」という書く主体を明示している点、歴史の主体である生活者と書く主体である「私」を同一化させようとする点、同一化させるために「私」を変革しようとする点である。生活者とともに、生活者の実践に役立つ歴史を作成するという姿勢をとり、原稿は村の一軒一軒に配り、当事者に検討してもらった、という。この「石間をわるしぶき」に対する批判に答える形で、執筆者である加藤文三は歴史を外から描くアカデミズムの叙述を批判している⁽³³⁾。

この加藤の批判に対し、この運動の主導者である石母田は、当事者による自己観察の限界に触れ、他者の視点と観察による「全体」の客観的分析の必要性和可能性を説いている⁽³⁴⁾。そして、村の歴史は国民の歴史の一部であるという認識を示している。つまり、当事者性を前面に出しつつも、全体を見渡す視点を持った専門家である歴史家の必要性を主張し、普遍性と客観性への回路を重視するのである。

1955年に刊行された『昭和史』（岩波書店）をめぐる「昭和史」論争の焦点も、歴史を叙述する主体についてであった。亀井勝一郎は、『昭和史』を人間不在の歴史であると批判し、さらには歴史叙述を行う主体である歴史家自体を問うた。これに対し、遠山茂樹は、歴史学の科学性を主張し、歴史学の研究方法を示した⁽³⁵⁾。

このような状況において、戦後歴史学内部での自己批判がなされた。その一例として、1964年に色川の『明治精神史』発表を契機に、近代史の領域で民衆思想史の潮流が現われる。民衆思想史の第一人者である安丸良夫は、「研究主体でもある“私”の次元への問いが歴史学には乏しいことを認め、『明治精神史』を「思想の主体性」について扱った作品と読んだ⁽³⁶⁾。

1975年には、色川は『ある昭和史－自分史の試み』を出版し、昭和前期の歴史のなかに歴史家の主体を押し出す歴史叙述を試みた。これは、「科学」に基づく態度による「客観的事実」の追求を目的とする歴史学への挑戦であったといえる。ただ、色川は、「事実は解釈されて事実になる」という考えには与せず、あくまで実証を尊重している⁽³⁷⁾。

1970年代には心性をキーワードとし、社会全体の構造的な解明を目指す歴史学の一つの潮流である社会史が日本にも紹介される。この社会史の台頭によって、戦後歴史学が相対化され、歴史認識と歴史叙述が問い直されることになった。1990年代には、戦後歴史学・社会史・修正主義⁽³⁸⁾の鼎立という状況を経て、今日に至っている。

以上、自分史は、大正時代の生活綴り方から、戦後の生活記録、そして橋本義夫のふだん記といった文章運動の系譜を受け継いでいる。また、自分史は、戦後歴史学における歴史叙述に対する一つの問題提起でもあった。

3. 日本における自分史の展開

「ふだん記」グループをはじめとする自分史サークルが全国各地で展開している。また、日本自分史センター（愛知県春日井市の文化フォーラム春日井内）や日本自分史文学館（山梨県吉田市）をはじめとする施設が設立され、国立国会図書館でも自費出版の納本を歓迎するなど、自分史保存の動きがみられる。

久保田治助は、色川・橋本の提唱した運動、地域コミュニティにおける自主的サークル活動、体系化・組織化された学習と、時代とともに変化していった自分史運動を3つに区分して論じた⁽³⁹⁾。小林多寿子は、「ともに書く自分史」、「物語産業から生まれた自分史」、「地域共同体と自分史」、「読者をえた自分史」、「賞をめざした自分史」と5つに分類し、自分史を論じている⁽⁴⁰⁾。

今日、自分史は定年退職を迎えた「団塊の世代」の経験・技術の伝達手段として、あるいは生涯学習として注目を集めている。その一方で、自費出版やカルチャー講座、自分史コンテストといった形で自分史市場を形成している。心理療法や自己啓発の手段として、そのほか町おこしやパーソナルブランディングといったマーケティング論としての展開も見せている。

さらに、インターネットの普及や出版流通界の変化もあり、一般の人々が文章を公開することが珍しいことではなくなった。色川の描く「民衆」と今日の一般人とは異なってきており、「庶民」とは何か考え直さなければならない状況に直面している。

以上のように、自分史は、多様化し、曖昧なものとなっているのが現状である。

おわりに

ライフヒストリー研究の用語を整理し、日本における自分史の起源を確認した。これによって、自分と歴史との接点を書く自分史の概念を示し、その他の文章運動との違いを明確にすることができた。さらに、日本における自分史の特色を、提唱者である色川大吉の思想から捉える試みを行った。とくに、ライフヒストリー研究がポストモダンの潮流や社会史の影響を受けているのに対し、日本の自分史が実証主義歴史学から生まれた運動である点を指摘することができた。最後に、日本における自分史の展開を紹介し、自分史が多様化している現状について触れた。

ただ、この自分史をライフヒストリー研究の中に位置付けるには不十分であった。多様化している自分史に対し、分析の視点を提示していくことを今後の課題としたい。

注(1) 2007年8月12、14日、愛知県春日井市の文化フォーラム春日井内にある日本自分史センターを訪問した。そこで、全国から寄せられた自分史を閲覧し、学芸員の方からお話を聞くことができた。

(2) 有末賢「生活史の社会学」（中蔦邦、松平誠編『講座生活学第3巻 生活史』光生館、1993年）。一方、有末は、「生活研究とライフヒストリー」（川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版、1984年）において、生活史とライフヒストリーとを「政治史・経済史・法制史などと比較した生活の歴史」と「個人の生活歴（＝ミクロの生活歴）」という観点から区別している。

- (3) 川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎—個人の「語り」にみる日本のキリスト教』(創風社, 2002年)。
- (4) 中野卓「ライフヒストリーによる人間研究」『私の履歴書—経済人』別巻(日本経済新聞社, 1981年)。
- (5) 中蔦邦「歴史としての生活史—日本史を中心」(川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版, 1984年)。
- (6) 大久保孝治「生活史分析の方法論的基礎」(早稲田大学『社会科学討究』98, 1988年)。
- (7) 桜井厚・小林多寿子編『ライフヒストリー・インタビュー質的研究入門』(せりか書房, 2005年)。
- (8) 文化事業の企画・実施や, 中核的な文化施設の運営を行うことにより, 市民の自主的・主体的な文化活動を支援し, もっと魅力ある市民文化の創造に寄与することを目的として設立された。特色ある取組として, 書の美術館である道風記念館の整備や, 書の全国公募展である道風展の開催などを通し, 「書のまち春日井」の発信・浸透に努めてきた。(かすがい市民財団ホームページより。http://www2.lib.city.kasugai.aichi.jp/zaidan/about/index2.html 2008年5月25日閲覧。)
- (9) 日本自分史センターホームページより。http://www.lib.city.kasugai.aichi.jp/zaidan/techou/boshu.htm, 2007年10月22日閲覧。
- (10) Denzin, N.K. (1989). *Interpretive biography*. Newbyry Park, CA: Sage.
- (11) 中野は, 個人的記録を「ライフドキュメント」という用語で表している。
- (12) 中野卓「歴史的現実の再構成—個人史と社会史」(中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』, 前掲)。中野は, この論文の中でデンジンを批判している。生の経験の語りをフィクションと考えるデンジンに対し, 歴史的社会的現実を対象とする社会学において現実の人生と創作を区別しなければならない, と。ただ, フィクションを創作とデンジンが捉えていたかどうかは検討の余地がある。
- (13) 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』(中央公論社, 1975年)。
- (14) 同上。
- (15) 同上。
- (16) 色川大吉『自分史—その理念と試み』(講談社学術文庫, 1992年)。
- (17) 同上。
- (18) 橋本義夫『だれもが書ける文章』(講談社, 1978年)。
- (19) 色川『自分史—その理念と試み』, 前掲。
- (20) 同『ある昭和史—自分史の試み』, 前掲。
- (21) 色川『ある昭和史—自分史の試み』, 『カチューシャの青春—昭和自分史【一九五〇—五五年】』, 『自分史—その理念と試み』, 『歴史の方法』を参照。
- (22) 色川『自分史—その理念と試み』あとがき, 前掲。
- (23) 同『歴史の方法』(岩波書店, 1992年)。
- (24) 同上。
- (25) 1968年度歴史学研究会大会報告にて「天皇制イデオロギーと民衆意識」を発表し, 「イエ」意識を取り上げた。この発表は, 当時の歴史学会には受け入れられなかった。
- (26) 色川大吉「民衆史と民俗学の接点」(『民衆史—その100年』講談社学術文庫, 1991年)。
- (27) 色川『自分史—その理念と試み』, 前掲。
- (28) 小林多寿子『物語られる「人生」—自分史を書くということ』(学陽出版, 1997年)。
- (29) 鈴木三重吉『綴方読本』(中央公論社, 1935年)。
- (30) 鶴見和子『生活記録運動のなかで』(未来社, 1963年)。
- (31) 石母田正「村の歴史・工場の歴史」(『歴史評論』第12号, 1948年)。
- (32) 東京都立大学歴史学研究会「石間をわるしぶき」(『歴史評論』第40号, 1952年)。
- (33) 加藤文三「国民的歴史学について」(『歴史評論』第44号, 1953年)。
- (34) 石母田正「会津紀行」(『歴史評論』第50号, 1953年)。
- (35) 亀井勝一郎「現代歴史家への疑問—歴史家に「総合的」能力を要求することは果たして無理だらうか—」(『文芸春秋』1956年3月), 遠山茂樹「現代史研究の問題点—「昭和史」の批判に関連して—」(『中央公論』

1956年6月), 遠山茂樹・今井清・藤原彰『昭和史』(岩波書店, 1959年), 大門正克編著『昭和史論争を問うー歴史を叙述することの可能性』(日本経済評論社, 2006年)。

- ③6 安丸良夫「近代の民衆像」(『歴史評論』1980年7月, 『<方法>としての思想史』校倉書房, 1996年)。
- ③7 色川大吉『“元祖”が語る自分史のすべて』(草の根出版会, 2000年)。
- ③8 「新しい歴史教科書をつくる会」をはじめとしたナショナリズムを強調し, 歴史修正主義の立場を主張するグループである。ただ, グループと言っても, 一枚岩ではなく多様な論者を含む。そのことが, よりいっそう複雑さを増しているといえる。旧来の復古的な歴史観ではなく, グローバリゼーションにおける危機意識から唱えられ, ひとり「つくる会」のみならず, 世界中で見られる動向であるという。歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』(青木書店, 2002年)を参照。
- ③9 久保田治助「地域コミュニティにおける自分史学習の意義ー日本自分史センターの事例から」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第13号(1), 2005年)。
- ④0 小林多寿子, 前掲。